

人口減少期に求められる資源管理のあり方を探る



自然・環境マネジメント研究部 環境計画研究グループ 衛藤 彬史

持続可能性や循環型社会への関心が高まる中、農地や山林、ため池等の土地資源、またそうした土地を基盤とする地域資源の価値は再評価されつつあります。

一方で、荒廃農地や放棄山林等の適切に管理されていない土地は増加しており、今後より一層の深刻さを極める資源管理について、人口減少下での方法論の確立が実務的にも学術的にも要請されています。

兵庫県美方郡は神戸ビーフや松阪牛の素牛となる但馬牛の原産地ですが、農地を維持するための1つの方策として耕作放棄地での放牧に取り組んでいます。農業用

水路の損壊を機に水稲作をやめ、ソバやヒマワリを栽培しながら集落で維持してきたものの、いよいよ担い手不足となり放棄されていた棚田は、放牧により維持され独特の里山景観を生み出しています。

こうした管理手法や、省力化・省人化に適した品種や技術の開発、新たな管理体制等の組み合わせにより、人口減少期に農地や山林、ため池等をそのポテンシャルを損なうことなくいかに将来世代につなげていくか、長期的な土地利用のあり方と、実現に向けたたくみが求められています。

